

ゴビンダ通信

No 11

発行 無実のゴビンダさんを支える会
Justice for Govinda - Innocence
Advocacy Group

June .1 .2003

Dear みなさん、おはようございます(Namaste)!

おげんきですか? わたしは、おかげさまで げんきです。

みなさんのおかげで、また1ねんぶり、おくさん(ラダ)と
あうこと できました。

このさびしいこと、なくなりました。

みなさん、どうもありがとう ございました。

ラダさん、にっぽんにきたから、この1かげつ はやくすぎ
ました。

3がつ21 にち、このあたらしいビルに ひっこしました。

このへやは せまいけど、とつてもべんりです。

わたしは 8がいに すんでいます。まどのすきまから、すこし
そら とじめん みること が できます。

まどから そとに さいている さくらの はな をみて、はるだな
とおもって、たのしんでましたよ。

ちょうど 6ねんまえ、オーバーステイで ここにきたとき、

このあたらしいビル つくりはじめたところでした。

みなさんのあい(LOVE)、わすれません。

これからも、よろしく おねがい します。

無実のゴビンダ・プラサド・メナリ

2003.4.30

こすげ(NEW BUILDING)にて

署名活動のお願い

公正な裁判を求める署名活動を行っています。同封の署名用紙を使って署名をお願いします。他の組織や団体にも働きかけて出来るだけ多くの署名を集めましょう。用紙が足りない場合は増刷りして下さい。第一次回収：7月20日まで

署名用紙の送り先：「国民救援会」または「支える会事務局」宛てに郵送でお願いします。

ラダさんから支援者へのメッセージ

2001年12月、夫と別れて8年目にして、初めて日本に来て、支援者の方々と出会うことになりました。それから、ほぼ1年後、このたび、こうして二度目の来日をはたし、懐かしいみなさまと再会することができたのは、何よりの喜びです。この二つの機会において、みなさまの献身的な活動ぶりに接し、このような、心ある方々にめぐりあえた幸いを、深く感謝しております。ゴビンダと私のために大変なご苦勞とご心配をおかけしているわけですが、みなさまの存在は、私たちの人生において、大きな支えとなっています。当初1ヶ月の予定で来たのですが、夫の希望で2ヶ月の滞在となりました。その間、毎日、面会に通うことができたのは、長年の単調な勾留の日々に耐えている夫にとって、この上ない楽しみでした。年老いた両親と幼い娘たちを郷里に残しているため、本日、私は、家族同然のみなさまに、残されたゴビンダのことを託して、帰国の途につきます。「支える会」の努力が実って、一日も早くゴビンダが私の所に戻ってくることを、切に願っております。これまでのご支援に感謝するとともに、どうか、これからも、私たちを見捨てることなく、引き続き、ご支援くださいますよう、心から、お願いいたします。

ラダ・マイナリ(2003年5月18日、羽田空港にて)

6月/7月学習会のお知らせ

『ゴビンダ事件の再検証～第1回 巣鴨の定期入れの謎を追って』

日時 : 6月29日(日)午後1時から5時
集合 : 大塚駅(都電荒川線乗り場)
内容 : 被害者の定期入れが発見された場所の現地調査と学習会。
* 学習会の会場 : 豊島区立巣鴨社会教育会館

『布川事件・再審への闘い』 (仮題)

日時 : 7月25日(金)午後7時から9時
講師 : 桜井昌司氏(布川事件冤罪被害者)
場所 : 弁護士会館5階会議室

支える会事務局からのお知らせ

事務局会議

* 毎月第2火曜日 午後7時～9時 現代人文社: 信濃町駅下車徒歩5分
< 次回は6月9日(火) >

* 支える会の現状と今後の活動について議論を深めたいと思います。事務局会議には、会員ならどなたでも参加できます。「支える会」を活発にするため、多くの方のご出席をお待ちしています。

無実のゴビンダさんを支える会 事務局

東京都新宿区信濃町20 佐藤ビル201 現代人文社気付 留守電・FAX 0426-37-8566
e-mail: mainali@anet.ne.jp ホームページ <http://www.jca.apc.org/~grillo>

ラダさん滞在記 「心から笑える日を待ちわびて」

ゴビンダ夫人ラダさんは明るい楽しい人でした。来日して二週間のホームステイのあと、目黒のアパートに移動し、初めて日本での一人暮らしを経験しました。恵比寿から日比谷線に乗って、週5日、一人で小菅まで行き、小菅の駅で支援の会の方と会い、ゴビンダさんに面会していました。自分で好きなネパール料理も作れて、一人暮らしは意外に快適だったようです。土日だけは面会もなく寂しいので、日本人宅訪問や100円ショップ見学、カラオケなど、プログラムをつくり、日本のカルチャーに接する機会を持ちました。カラオケでは、透き通るような美しい声で、遠い空の向こうの、愛しい人をもとめる歌を唱ってくれました。ゴビンダさんに対するラダさんの気持がそのままメロディーとなり、心に深く響くものでした。今回、ラダさんとかなり多くの時間を共に過ごし、ラダさんは、とっても楽しくて明るい人だということがわかりました。「この話、他の人にはしないね」といいながら、突拍子もないことを言っただけは、よく一緒に笑いました。でも、ラダさんは、こんなに笑っていて良いのだろうか、とすぐ反省します。そして、「私は人前では悲しい顔はしないの。でも、一人でいる時はいつも泣いているのよ」と言うのです。国民救援会の関西ブロック学習会に出席のため、大阪訪問を終えて帰った日、ラダさんの顔に大きなおできが三つもできて、顔全体がパンパンに腫れてしまいました。一緒だった岡野さんがこれは大変と、すぐにお知り合いの皮膚科の先生に連絡を取り、連れていきました。診断は「面疔」でした。脳に膿がいき、命を落とすこともある怖い病気です。でも、抗生物質と塗り薬で一週間ほどで良くなりました。その皮膚科の中込先生は、アジア教育支援の会(esa)というNGOの理事長もしておられ、ネパールでも貧しい家庭の子供たちの教育支援をしています。後日ラダさんはesa事務所を訪問して、ネパールの政治事情、教育事情などをお話しし、美味しいカレーやチャパティをご馳走になりました。ラダさんは、「先生には本当にお世話になった、実はおできのこと、とても心配だったの」と感謝していました。そして、少し小さい声で「あの時のカレーは美味しかったわね」と繰り返していました。本当は明るいラダさんが、心おきなく笑える日が早く来るように祈っています。

(蓮見順子)

ラダさんと一緒に関西で支援を訴える

4月28日から5月1日にかけて、ラダさんと一緒に国民救援会関西ブロックの学習会に参加しました。それを機会にラダさんを京都に案内しました。

関西ブロックでの学習会では、私が事件の経過と問題点を説明し、ラダさんがゴビンダさんの人柄や現在の辛い心情を切々と訴えました。ラダさんは、ゴビンダさんが家族はもちろんのこと、近所のお年寄りや子供たちにもとても親切に接する心やさしい人柄であることから、「近所の人やゴビンダを知っている村の人たちは、ゴビンダに人殺しはできないと、夫の無実を信じている」と、イラム村の生活やこの事件への村人たちの反応を紹介してくれました。

ラダさんは、ゴビンダさんと17歳で結婚したが、夫が日本に出稼ぎに出かけたので一緒に暮らしたのは、たった3年程でしかなく、「やっと家族みんなで生活できると、夫をはじめネパールの家族もそれを楽しみにしていた矢先に今回の事件に巻き込まれてしまった」と、やるせない思いを語りました。この10年間一人で年老いた両親や二人の子供たちの世話など、一人でその重荷を背負って頑張ったことなども話してくれました。私自身も初めて聞く話も多く、参加者と一緒に感動して聞き入りました。

関西の学習会を利用して、ラダさんを京都の名所に案内しました。京都では、現在、神戸で研修生活を送っているゴビンダさんの親戚、ディリ・シワコチさんと待ち合わせて、金閣寺や嵐山などを見て

回りました。ところが、道中わたしが度々カメラケースなどを忘れるものだから、ラダさんから「ズケランさん、ビルシヌ(忘れる)・ビルシヌ？」と移動するたびごとに注意をされるなど、どちらが付き添いなのかわからないくらいでした。

関西での学習会で通訳してくれたビーナ・リジャー女史は、たまたまイラムのとなり村の出身だということもあって、二人は大変打ち解けて話し合っていました。

今回の関西への行動は、「支える会」事務局にいろいろとご援助を受けて実現しました。今回の学習会を通じて、東京中心の支援運動が少しでも全国に広がることを期待しています。(瑞慶覧 淳)

学習会報告 「現場からみえること」 ～ムミア裁判の学習会に参加して

「事件は現場で起きてるんだ!」「踊る大捜査線」の熱血デカ・織田裕二にそんなセリフがあったが、それは何も刑事だけでなく、真実を知りたいと願う市民にとっても言えている。5月23日午後7時から弁護士会館で開かれた「ムミア事件」についての学習会で、講師の今井恭平さん(ムミアの死刑執行停止を求める市民の会、支える会会員)の話を聞きながら、改めて痛感した。現場に行くと初めて、わかることがあると。

事件が起きたのは1981年12月9日の午前3時55分頃。アメリカ・フィラデルフィアでフォークナーという警官が射殺され、現場には銃で撃たれたムミア・アブ=ジャマールもうずくまっていた。直後に駆けつけた警官隊はムミアに暴行を加えたあげく逮捕。第1級殺人の容疑で起訴されたムミアは、セイボ判事と陪審によって死刑判決を受ける。殺人犯とされたムミアが黒人解放組織ブラックパンサーの元活動家で、警察に目の敵にされていたラジカルなジャーナリストとあって、事件は国際的な注目を集めた。

今井さんは事件の内容を伝えるビデオ上映の後、事件と裁判について説明した。

シンシア・ホワイトという売春婦は、「犯行の一部始終を目撃した」という決定的証言をし、ムミア有罪の決め手とされた。だが今井さんは、99年に現場に行った経験から、「警官の姿を見ながら(捕まりかねない)彼女が身を乗り出したのは不自然。通りは狭く、現場にいたら他の人から姿が見えなかったはずもない」と、生々しく疑問を投げかけた。

さらに近年、アーノルド・ビバリーという男性が「真犯人」だと名乗り出る。「警察に雇われFBIの秘密捜査官を殺した」というのだ。荒唐無稽とも思えるが、フィラデルフィア警察は腐敗を極めFBIに内偵されており、その後幹部らが逮捕されている。

再審の扉は、それでも開かない。「黒人を陪審から排除する法」を研修する検察、事実を調べない連邦裁判所、被告を速やかに死刑にするための法律……。日本の司法改革の“お手本”とされる米司法の闇にも、話は及んだ。

映画「12人の怒れる男」のように、陪審は激論の末に無実の人を救うんじゃないのか?私は、少なからずショックを受けた。特に最初の死刑判決を出したセイボ判事が再審にも携わるという不公正は、ゴビンダさんの無罪勾留を決定した東京高裁の高木俊夫裁判官が控訴審裁判長も担当し、逆転有罪判決を書いたことを連想せずにはいられない話だった。

沖縄返還をめぐるデモでの警官死亡で犯人とされた星野文昭さん(無期懲役で服役、再審請求中)の支援者からも発言があり、「無実の罪」で自由を奪われている人々に思いをいたした。次回は、ゴビンダさんえん罪事件のナゾを現場で考えるという。今度は自分の足で歩きながら、無実の人が救われる裁判の形を考えてみたい。(北 健一)